Sir John Falstaff と道化の論理

西　野　義　彰

I

Henry IV, Part I & II が，創作以前から一つの長いドラマとして意図され，*Part I* と *Part II* は単にその前編と後編に過ぎないのか，それとも，*Part I* の創作中もしくは完成後に何らかの事情により急きょ *Part II* が計画され，それぞれが一個の独立した作品として意図されたものかについては見解の分かれるところである[1]。このドラマの構造上の問題に関する議論はさておくとして，ここには上演以来相当の人気を博し，シェイクスピアが創造した人物の中では Hamlet に次いで有名であり，喜劇的な人物の中では恐らく最も偉大な存在と言える Sir John Falstaff が登場する。今日までに示された彼に対する様々なアプローチが暗示するように，太鼓腹の，機智と笑いに富み，本能と欲望の赴くままに，極めて大胆かつしたたかな生命力を持って，我々の法と道徳とは無縁の世界に生きる Falstaff は，Dr. Johnson をはじめ多くの批評家たちを悩ませてきた。この捉え難い厄介な人物に関する諸説の大まかな近年までの歴史は，*The Reader's Encyclopedia of Shakespeare* の中の Falstaff の項がごく簡潔にまとめてくれている[2]。ここでは少し趣を変えて，観客にドラマの主人公以上に，強烈な印象を与え魅了し続けるこの不思議な人物を，幾人かの主要な批評家たちがどのように捉えてきたかを簡単に見ておきたい[3]。

Dr. Johnson は有名な Falstaff 論の中で，彼について描写することの困難さを訴えながらも，実に簡明的確に Falstaff の多様な様相と本質の一端を表現し得ている。

---

1) Cf. Harold Jenkins, "The Structural Problem in Shakespeare's *Henry IV*" from *A Selection of Critical Essays* edited by G. K. Hunter (Macmillan, 1970), pp. 155-73.

2) *The Reader's Encyclopedia of Shakespeare* (Crowell, 1966), pp. 220-21.

3) ただし，本論の第2，第3章で，作品と平行して彼の具体的な言葉と行動，彼の内的本質，*Part II* 終幕における新王による Falstaff の拒絶と追放等に関して詳しく論じることになるので，ここでは先走って詳細に取り扱うことは避けたい。

> But Falstaff unimitated, unimitable Falstaff, how shall I describe thee? Thou compound of sense and vice; of sense which may be admired but not esteemed, of vice which may be despised, but hardly detested. Falstaff is a character loaded with faults, and with those faults which naturally produce contempt. He is a thief, and a glutton, a coward, and a boaster, always ready to cheat the weak, and prey upon the poor ; to terrify the timorous and insult the defenceless. ... Yet the man thus corrupt, thus despicable, makes himself necessary to the prince that despises him, by the most pleasing of all qualities, perpetual gaiety, by an unfailing power of exciting laughter ...[4]

Dr. Johnson 以降 A. C. Bradley において頂点に達するロマン主義批評までを視野に入れた時に，上の Falstaff 論で特に大きな影響を与えた言葉は，恐らく 'coward' であると言ってよい。その間しばらくは，Falstaff の「臆病」と *Part II* 終幕における，新王による Falstaff の拒絶をめぐって，主に後者への同情論を中心に議論は展開される。Falstaff に対して多少厳格な Dr. Johnson の見解に比して，A. C. Bradley の捉え方は趣を異にしている。Bradley を殊更困惑させるものは，単に Falstaff 拒絶の場面に見られる彼の失意落胆だけでなく，Henry V の Falstaff に対する予想外の振舞い方であった。結局のところ，殆んど純粋なまでにユーモアに富み，道徳的判断の対象にはなり得ない不滅の人物を創造しながら，シェイクスピアは，最終的な処理の段階において大きなミスを犯したということになる。Bradley にとって Falstaff は，完全な自由と人生からの解放感を存分に与えてくれる 'the humorist of genius' であった[5]。

社会史的，文学史的見地から道化に関する秀逸な研究を行なった Enid Welsford は次のように述べている。道化は人生のもろもろの事実に対する勝利者であり，少なくとも虚構の世界においては彼は確かに勝利すべきであるのに，作家は非情にも突如として彼を拒絶し，敗者の運命をたどらせる。しかし，多分

4) Samuel Johnson, "A Note on *Henry IV*" from *A Selection of Critical Essays, op. cit.*, pp. 23-24.
5) A. C. Bradley, "The Rejection of Falstaff" from *A Selection of Critical Essays, ibid.*, pp. 56-78.

シェイクスピアは そこにおいて妥当であった[6]，と結論してやや複雑な思いを吐露している。John Dover Wilson は，Falstaff を相対立する様々な矛盾の塊として捉え，彼の中に奇蹟劇の Devil, 道徳劇の Vice, インタルードの Riot, さらに，Plautus の *miles gloriosus*, Repentance, Lord of Misrule, Fool, Buffoon, Jester, それに，その起源が民俗の昔の暗い淵の中に消えてしまう風変わりな人物たちの機能や属性を認める。また，一方で Falstaff は Eastcheap が表わすすべての祝宴や歓楽を象徴し，他方では，落ちぶれた紳士や兵士たちが当時のロンドンでよく行なった陰険なごまかしなどを反映していると考え，彼の劇的機能は，王子の道化として軽い息抜き (light relief) を提供することであると論じる[7]。William Empson は Dover Wilson を高く評価しながらも，Falstaff が登場する一連の作品を Dramatic Ambiguity の観点から捉える必要があることを強調し，次のように述べる。Falstaff は英国人によって彼らの階級制度に対してなされた最初の 'major joke' である。また，彼は多少 Vice の要素を有し，部分的には，ラテン劇の「臆病な空威張りする軍人」でもある。一連の史劇という観点から見た場合，彼は社会の無秩序を意味し，彼の周囲には中世的ともルネサンス的とも言えぬ時間を超越した要素，恥ずべき上流階級の人間と見なし得る要素がある。他に，自然人に対する大きな信頼，それを眺める喜びに似たものがあるが，Falstaff の最も重要なルネサンス的様相は，国家主義とマキアヴェリズムであろうと推測している[8]。

W. H. Auden によると，Falstaff は意志ではなく無邪気な願望によって支配されたオペラブーフ的喜歌劇と偽のアクションの世界，人の言動すべてが見せかけに過ぎないために誰も苦しむことのない世界に属している。彼は永遠の現在に住んでいる為に，時間や歴史は彼には何ら存在しない。我々はかつてすべて Falstaff であったが，後に超自我を持った社会的存在となった。結局，Falstaff は自己に対する重要性を唯一の価値規準とし，他者から期待するものは注目であり，道化の知と限界を合わせ持った人物である[9]。C. L. Barber は，Falstaff の喜劇の中に，舞台上で習慣的になっていた道化振りと休日に常に見

---

6) Enid Welsford, *The Fool : His Social and Literary History* (Peter Smith, 1966), p. 284.
7) John Dover Wilson, *The Fortunes of Falstaff* (Cambridge, 1943), pp. 20-38.
8) William Empson, "Falstaff and Mr. Dover Wilson" from *A Selection of Critical Essays, op. cit.*, pp. 135-54.
9) W. H. Auden, "The Prince's Dog" from *A Selection of Critical Essays, ibid.*, pp. 187-211.

られた愚行という二つの主要な祝祭的伝統の融合を認める。王子が 'everyday' を表わすとすれば Falstaff は 'holiday' を表わすが，後者は正確には 'holiday lord' ではなく，絶えず瞬間が提供するいかなる名前や意味をも捉えながら生きてゆく事実上の道化 (*de facto* buffoon) である。*Part I* では彼は Carnival として彼の世界を統治し，*Part II* では主に彼の裁きに重点が置かれる[10]。Clifford Leech によれば，Falstaff は邪悪や無情の一面だけでなく，機智と逞しい生命力をも有している。彼の行動はすべて悦楽と生存のためになされるが，Hotspur と同様冷静な打算などとは無縁の人物である。彼の虚偽は王侯貴族の計略に対して滑稽な平行をなすが，その心もとない有様にも拘らず彼らより遙かに活力に満ち，彼らが認識し得ていない人間本性の全範囲を表現している[11]。

Praisers of Folly という道化文学に関する名著で知られる Walter Kaiser は，まさに自然それ自体を体現する太った老道化があまりにも巨大すぎて，彼の周囲全体に思いを巡らすことは困難であると告白している。他方で，Kaiser は wise fool としての Falstaff の内部に潜む撞着語法的性格に照明を当て，彼が単に機智の対象のみならず機智の源でもあるとして，道化たることの事実を十分認識している知恵者としてのイメージを浮き立たせている[12]。散文の観点から Falstaff の世界を捉えようとする Brian Vickers は，Falstaff に対する現代批評の傾向と幾つかの方法論の功罪に言及し，その大きな弱点は，最終的に Falstaff に何が起きるかということに傾注しすぎて，在るがままの姿を軽視したことであると指摘する。17世紀以来，人々は Falstaff という人物の観念に引かれた感があるが，我々の変わることのない Falstaff の経験は，十二分に考え抜かれ真に迫った個性についてのものであり，彼に関する最も洞察に満ちた説明は Dr. Johnson によるものであると結論している[13]。

以上，Falstaff への多様なアプローチを概観してきたが，程度の差はあれ，各々が独自の立場から慎重かつ鋭角的に，脂肪太りの巨漢の実体に迫っている

---

10) C. L. Barber, *Shakespeare's Festive Comedy* (Princeton paperback edition, 1972), chapter 8.

11) Clifford Leech, *The Chronicles* (Longmans, 1962), pp. 22-27.

12) Walter Kaiser, *Praisers of Folly* (Harvard, 1963), pp. 267-74.
さらに Kaiser は，この部分でアリストテレスの図式を Falstaff に応用し，彼が絶えず両極間を移動し eirôn と alazôn の両方を演じるために，彼の中で我々は両方の側から真実を見つめることになり，まさしくこの点において彼の性格の最高の複雑さがあると述べている。

13) Brian Vickers, *The Artistry of Shakespeare's Prose* (Methuen, 1968), pp. 89-90.

ように思える。この巨大で不思議な魅力の人物が内包している無数の要素を表現するには，それに等しいだけの概念が必要になるかも知れない。だが，彼に対して与えられてきた主要な呼称，Vice, Tempter, Disorder, Lord of Misrule, Mock King, Scapegoat, Carnival, Humorist, Fool, Clown, Jester, Buffoon 等の中で，最も有用に思われるのは Fool（フール，道化，愚者）である。尤も，この呼称にしても，彼の内部に潜む属性のどれだけを網羅し得るかは疑問として残るし，前述の他の呼称に頼らざるを得ない場合も多いであろう。しかし，fool, clown, jester など愚行と結びつく一群の観念が非常に歴史も古く広汎に流布していて，それ全体を表わせる単一の言葉を明らかに必要としなかったし，現在もそのために単一の言語を必要としていない状況[14]において，愚行やそれに似た状態に陥った人間を名付けるのに最も使用される英語が 'fool' であり，それがしばしば Falstaff の言葉と行動を理解する際に大きな手掛りになるという理由により，fool の視点から彼を眺めることはそれなりに価値があるように思われる。

OED による 'fool' の定義，最も頻繁に用いられる三つの意味，fool と交換可能な他の言葉などの考察は William Willeford にまかせて[15]，fool（道化）の基本的特徴について Willeford を中心に一瞥しておきたい。まず道化（fool ←follis）は語源的にもふいごから出る風のような存在で，その突飛な言葉と行動にはさして意味がなく，仮にあっても合理的理性では容易に捉えることは出来ない。歴史的に見ると，殆んどの道化が異常なまでに性的過剰さを示してきた。彼はたいてい判断力や分別に欠け，愚かしく見えるだけでなく相当無器用でもある。我々には当然と思われる事物の法則や秩序に従って知覚したり，理解したり，行動出来ない。彼の肉体的怪物性と心的機能の根本的異常性は，多くの道化が身に着けていた特有の衣裳と同様，形や意味の混沌からの出現と同時に，混沌への回帰を表現している。道化と愚行に特徴的な点は，彼が真理を語ること自体が必ずしも中心的なものではなく，多かれ少なかれ，それが愚鈍，狂気や怪奇さのもろもろの表現と交換可能だということである。彼が通常の秩序に従って知覚したり行動出来ない，または，したがらない結果，いろんな形で限界を越えてしまう。この限界の超越において，彼は勝利もし敗れもする。大抵道化は直観と感情を現実対処の主な器官にし，彼の無器用さ，愚かさや敵がいかなる状況に彼を追い込もうと，最終的には直観と本能が彼をした

14) William Willeford, *The Fool and His Scepter* (Northwestern U. P., 1969), p. 9.
15) *Ibid.*, chapter 2. この章では特に Fool の基本的特徴が詳細に論じられている。

たかに生き延びさせる。彼が機智に富んでいる場合には，彼のジョークの奔流の方がそれに対処する他者よりも常に一歩先んじている。彼の関心は普通現実性よりも可能性の方にあり，彼の方が我々よりそれにより開かれている。彼は常に異常性が色濃い道化の領域内に留っているのではなく，賢と愚，正気と狂気，センスとノンセンス，現実と虚構，理性と反理性といった異なる次元の間を絶えず敏捷に移動し，単一の次元に縛られることを拒否する。また，対立する世界の接点に立ち，異なる次元を簡単に交錯させる力と日常的な判断規準や価値を転倒させる不思議な能力を賦与されている。道化の愚行や柔軟な視点の移動，我々の日常的思考様式を決定している常識や固定観念などの境界のかく乱は，微妙な形で，活力を失ない硬化しがちな社会を活性化させるのに大いに貢献している。以上，道化の基本的特徴を大雑把に見てきたが，それらの大部分が *Henry IV* の Falstaff に当てはまることは，今後の考察によりしだいに明らかになるであろう。

II

前章では，Falstaff についての様々な捉え方と，fool という広い概念の中に組み込まれる多様な人物たちにほぼ共通して見い出される基本的特徴を概観したが，本章と次の章ではそれぞれ *Henry IV, Part I* と *Part II* の作品に即して，Falstaff の具体的な言葉と行動を道化の論理という視点から考察してみたい。

Part I で Falstaff が登場するのは，1幕2場においてである。こともあろうに，彼は開口一番 Hal 王子に，"what time of day is it, lad?"[16] と時間を尋ね，当然のことながら王子から皮肉たっぷりの批判を浴びることになる。空腹になればいつでも腹を満たし，情欲が込み上げてくればその都度売春宿へ走ったり，常に放蕩三昧の暮しをしている Falstaff にとって，通常の時間意識は本来無縁のものであり，自分でも認めるようにそれは明らかに愚問である。遊びと祝祭，昼と夜の転倒の世界に生きる Falstaff は，言わば無時間の空間を自由に浮遊する奇妙な存在に似ていて，仮に時間があるとすれば，それは彼の肉体のみが感じる時間であろう。それは，少なくとも心理的に，永遠の

16) この小論において使用するテキストは The Arden Shakespeare: *King Henry IV, Part I* edited by A. R. Humphreys (Methuen, 1966) である。以後，作品からの引用はすべてこの版によるものである。

現在に生きるすべての道化が共有する時間でもある。面白いのは，王子の権威をかさに着て，他の連中と追剝などを繰り返し，道徳とは無縁の次元に生きているはずの Falstaff が，自己の行動の社会的意味とそれに対する制裁を懸念して，王子に "Do not thou when thou art king hang a thief." (I, ii, 59—60) と言って，冗談の中に本音らしきものを洩していることである。さらにその後で，彼は現在の堕落の全責任を王子に帰して，自分の被害者意識を強調し改心のポーズさえ見せる。

> before I knew thee,
> Hal, I knew nothing, and now am I, if a man should
> speak truly, little better than one of the wicked.
> I must give over this life, and I will give it over...
> (I, ii, 90—93)

Falstaff の本心を見抜いている王子が即座に翌日の追剝計画を仄めかすと，

> 'Zounds, where thou wilt, lad, I'll make one; an I do
> not, call me villain and baffle me. (I, ii, 97—98)

と言って，直前に見せた悔悛の情などは一瞬に忘れ去り，快よく一味に加わることを約束する。王子の呆れ顔に対して彼は，それが自分の生業であり，人が自分の生業に精を出すことは決して罪にはならない，と滑稽な詭弁でかわすのである。道徳劇の Vice は，伝統的に，誤った方向に導かれたのは自分の方だと主張し，己れを犠牲者に仕立て上げる傾向があったようで，Falstaff の被害者意識はこの延長として読める。ドラマの中で彼がしばしば口にする悔恨の言葉も，Vice の独善的な考え方と道化の詭弁によって支えられた単なる言葉だけのもので，その背後に脈打つ心情は，他者はすべて窮屈に生きる阿呆であり，この世が愚行を繰り返す人間に満ち，誤りを犯すのが人の常であるならば，その道理をわきまえ本性に徹して快適に生きることだというものに近いであろう[17]。

Falstaff が去ると，Poins は王子に追剝計画の真の目的について説明する。それは，彼らが事件後居酒屋で再会した時に，この 'fat rogue' が作り出す途

17) Cf. Walter Kaiser, *op. cit.*, pp. 256-60.

方もない嘘を楽しみながら反証し，矛盾を暴いて見せるためである。王子はその提案に賛成し，さっそく実行に移されることになる。Falstaff の機智とユーモアと笑いに富んだ台詞は随所に見られるが，2幕2場冒頭で馬を隠され重い太鼓腹を引きずるように歩く時の，あまりにも誇大で滑稽な言葉の中に我々は彼らしさの一端を見ることが出来る。しかし，非常に印象深いのは，王子と Poins に襲われた時，自分の巨体をすっかり忘れ脱兎の如く逃げ帰る様と，居酒屋で彼らしさを存分に発揮し王子らの厳しい反論を見事にかわす場面である。

散々な目にあった Falstaff が他の連中と入って来るや否や，王子と Poins に罵声を浴びせる。事の成り行きを知っている王子たちは，からかいながら激怒の理由を尋ねるのだが，この時点から予想通り Falstaff の途轍もない嘘が展開し始める。実際には彼ら4人が数人を襲撃し，金を山分けしている時に王子と Poins の2人に襲われただけである。しかし，Falstaff の話では，少なくとも彼だけで50人を相手に熾烈な戦いをし，その内ゴム引き服の男（rogues in buckram suits）を2人殺したということであり，注目すべきは，殺した悪漢の数が次々に変化し11人にまで増えてしまうのである。王子はあまりにも見え透いた嘘にただ唖然として，

> O monstrous! Eleven buckram men grown out of two!　　(II, iv, 214—15)

と言う他ない。遂に腹に据えかねて真実を暴露し，Falstaff を袋小路に追い詰めると，機智縦横の老道化は実に巧妙に相手の攻撃をかわすのである。

> By the Lord, I knew ye as well as he that made ye. Why, hear you, my masters, was it for me to kill the heir-apparent? should I turn upon the true prince? Why, thou knowest I am as valiant as Hercules: but beware instinct—the lion will not touch the true prince; instinct is a great matter. I was now a coward on instinct: I shall think the better of myself, and thee, during my life...　　(II, iv, 263—70)

彼の論理では大体次のようになる。彼は最初から例の2人が誰なのかを見抜い

ていたし，抵抗もせずに退いたのは王子への配慮からで決して臆病からではない。本能はとりわけ偉大であり，それが彼にどう振舞うべきかを瞬間的に教えてくれたのである。あの一瞬彼は本能に従って 'coward' になっただけであり，本来勇敢であることに何ら変わりはない。自己の臆病を本能と王子への配慮にすり変えて，自己の体面を失わずむしろ鋭敏な才智を相手に印象づける当意即妙は見事と言う他ない。王子たちの目的が，老獪な道化が考え出す 'incomprehensible lies' (I, ii, 181) と独特の卓抜な論法を聞いて楽しむことにある以上，その目的は十分達せられたことになる。

Falstaff が臆病者か否かの議論は，Morgann 以来真剣に行なわれてきたが，彼を臆病者と断定したところで，多くの読者を魅了してきた彼のイメージを決して損なうものではない。Kaiser が論じているように，Falstaff の臆病を否定しようとするあらゆる試みは，恐らく，かくも愛すべき人物がそれほど下劣であるはずがないし，もし彼がより勇敢に行動すれば，我々は彼により愛着を抱くだろうという心情から発している[18]。しかし，Falstaff の臆病は自己の生命と悦楽を最優先にするという道化の哲学に起因するものに過ぎず，それを無理に否定すれば歪んだ捉え方にならざるを得ない。現実対処の器官として道化は本能と感覚に最も依存するが，本能に基づく臆病は，'honour' や騎士道精神を重視する Hotspur にとって悪徳であっても，生き延びることを信条とする Falstaff にとっては極めて重要な美徳になる。彼を在るがままに見るならば，臆病も彼の実体の一部として見えてくるはずである。平然たる態度で繰り返す詐欺や下劣な行為も同様に，次元を異にする道化の価値規準から見れば，それらは悪ではなく善の領域に入るであろう。

事の経緯を知った連中は一安心して，即興の劇 'a play extempore' で一時を楽しむことになる。最初は王子が自分の役を，Falstaff が王の役を演じることになるが，粗末な椅子を玉座に，くすんだ剣を王笏に，座ぶとんを王冠にし，酒で顔を赤らめた偽王 Falstaff の姿は異様であまりにも馬鹿げていて，女将が "O Jesu, this is excellent sport, i'faith." (II, iv, 385) と叫ぶように，端的に遊びと休日の世界を強調している。ここでも彼の機智と笑いに富んだ言葉や，他者よりも自己の利益と便宜を第一に置く特有の価値観が印象的である。立場を逆転してからの両者のやり取りにも同じような面白さがあるが，特に王子が Falstaff の巨体，50〜60才にもなる老齢，彼の体内に巣くう様々な悪徳に関して豊かなイメージを積み重ね，畳み掛けるように罵倒する箇所

18) Walter Kaiser, *ibid.*, p. 233.

は，Falstaff の幾つかの面が明瞭に浮き彫りにされていて見物である (II, iv, 442—53)。

Eastcheap の居酒屋を中心とする世界は，あたかも時間が静止し自由と快楽に満ちた祝祭の世界のように見えるが，そこにもしだいに無気味な暗雲が立ち込めてくる。Henry IV に対する Hotspur たちの謀反により，王子は徐々に遊び仲間から離れ，Falstaff も歩兵の指揮権を与えられ体制派に加わる。人一倍本能に恵まれそれだけ鋭く危険を感知するせいか，3 幕 3 場では微かに彼の底抜けの陽気さに影が落ちてくるように思える。しかし，それも微かに過ぎず，彼が自分の真面目で品行方正な過去と現在の放蕩生活を滑稽に比較したり，Bardolph の赤鼻に痛快な野次を飛ばす所などは，まさに witty fool として面目躍如たるものがある。一方，慢性的な金欠病は多くの道化にとって一つの宿命であるが，Falstaff の場合も例外ではなく女将から相当の借金をしている。催促されても，"I'll not pay a denier." (III, iii, 77) と居直っているように，放縦な生活のために彼には支払い能力は全くないし，恐らく最初から返済の気持などなかったであろう。約束を守ったり実行するというようなことは，道化の価値観から見れば何ら意味のない事柄である。彼にとって最も重要なことは，弱点さえ一つの強みに変えながら，いかに周囲の事物を活用し快適に生きるかであって，それによって他者がいかなる影響を受けるかについては全く関知しない。尤もらしい理屈や脅しなどは，無学で無力な人々を利用するために Falstaff がよく用いる戦術であるが，3 幕 3 場でもその好例が見られる。追剝の件で調べに来た役人たちを逃れ，壁掛けの後に隠れた彼はそのままいびきをかいて寝込むのだが，その時王子らの目前でポケットの中味を取り上げられる。そこで失ったものは居酒屋の請求書や売春宿の仮証文，二束三文の指輪程度に過ぎないのに，莫大な被害額を訴え，正直な女将を辛辣に中傷して弁償を求める。しかし，王子に事実を暴露され事の真偽を詰問されると，Falstaff は

> Dost thou hear, Hal? Thou knowest in the state of innocency Adam fell, and what should poor Jack Falstaff do in the days of villainy? Thou seest I have more flesh than another man, and therefore more frailty.　　(III, iii, 164—68)

と言って，巧妙に自己の悪業を時代のせいにしたり，自己の肉体的脆さを強調して同情論を展開する。結局，一つの好機が去ると，借金の件はうやむやにしたまま一応の和解が成立する。それにしても，W. H. Auden が指摘しているように，Falstaff は何の恥らいもなく信用に依存して生きているが，彼の債権者たちの誰一人として重大な迷惑を受けているように見えないのは興味深い[19]。

内乱の勃発が目前に迫まり，Falstaff も急いで兵を徴集することになるが，ここでも我々の期待通り彼は王の徴兵権を悪用する。裕福な者や臆病者から相当の賄賂を取り私腹を肥やしてから，結局集めた兵士たちは彼自身も赤面するほどの，絞首台から引き下ろした死体のように悲惨で猥雑な連中ばかりであった。およそ戦場へ送り込むには殆んど適さない哀れな兵士を従がえ，酒を飲みながら行進する Falstaff の姿はまさに滑稽であるが，部下について王子に，

> Tut, tut, good enough to toss, food for powder, food
> for powder, they'll fill a pit as well as better; tush,
> man, mortal men, mortal men.　(IV, ii, 65—67)

と言う時，我々はそこに一瞬ながら，現世の苦痛，倦怠や息苦しさを忘れさせてくれる底抜けの陽気なユーモアと笑いではなく，グロテスクで薄気味悪い他者の生に対する彼の無関心，非情さを垣間見る。だが，その後で締めくくりの言葉として彼が語る

> Well,
> To the latter end of a fray, and the beginning of a feast
> Fits a dull fighter and a keen guest. (IV, ii, 78—80)

という警句風の二行連句には，言葉と内容のレトリカルな対比が見られるだけでなく，戦いを嫌悪し酒宴は心から歓迎するという彼の本性が要約されていて面白い表現である。

いよいよ反乱軍との決戦が切迫した時，Falstaff は独自の視点から名誉に関するユニークな見解を披瀝する。

---

19) W. H. Auden, *op. cit.*, p. 206.

Can honour set to a leg? No.
Or an arm? No. Or take away the grief of a wound?
No. Honour hath no skill in surgery then? No. What
is honour? A word. What is in that word honour?
What is that honour? Air. A trim reckoning! Who
hath it? He that died a-Wednesday. Doth he feel it?
No. Doth he hear it? No. 'Tis insensible, then?
Yea, to the dead. But will it not live with the
living? No. Why? Detraction will not suffer it.
Therefore I'll none of it. Honour is a mere scutcheon
—and so ends my catechism.　　(V, i, 131—41)

勇猛果敢に戦って名誉を得たところで，それによって負傷した体が元に戻ったり，苦痛が和らぐわけでもない。要するに，名誉というのは一つの言葉であり空気の如きものに過ぎず，死ねば聞くことも感じることも出来ないし，たとえ生きていても名誉はやがて中傷家により台無しにされる運命にある。それ故，名誉という代物は命を投げ出してまで手に入れる価値はない，というのが Falstaff の論点である。*Part I* では少なくとも二種類の名誉観が扱われており，その一つは Hotspur によって代表される中世的騎士道精神と結び付き，生命よりも遙かに重要な意味を持つ名誉観であり，他の一つは Falstaff によって語られる，現世での生を最も重視して享楽主義的で道化的な立場から捉えた名誉観であり，恐らく後者が前者のパロディとして意図されている。Brian Vickers が指摘するように，Falstaff の自問自答は，名誉というものが言葉であり空気に過ぎないという前提に立てば，確かに妥当であり説得力がある[20]。それをさらに進めて，言葉全体が空気であり，意味と実体を全く持たない空なるものであるという論理に行き着くと，Falstaff の詭弁や三段論法も言葉に依存する以上，他者ではなく自分を混乱させる結果になる。しかし，彼の真意は多分自己の臆病や下劣な行為を弁護し正当化することにあり，その他に概念全般の相対性に我々の目を向けるという狙いもあるかも知れない。

戦いが始まっても，重い巨体を引きずり汗だくになって逃げ回る Falstaff の口からは，依然として "God keep lead out of me, I need no more weight than mine own bowels." (V, iii, 34—5) のような愉快なジョークが

20) Brian Vickers, *op. cit.*, p. 115.

連発される。生と死を分ける微妙な瞬間に酒瓶を後生大事に持ち歩けば，"What, is it a time to jest and dally now?" (V, iii, 55) と非難されるのは当然であるが，唯一の関心が名誉や国家の命運ではなく，自己の生命と快楽にある Falstaff にとって，それは彼独自の行動原理に基づく自然な振舞いである。彼の大きな魅力の一つは，様々な法や道徳律によって厳しく抑制され，容易に実現出来ない我々の諸願望を自由かつ大胆に実現して見せるところにある。Falstaff が勇猛な Douglas に突如出会った時，殆んど戦わずに倒れ死んだ真似をするのも，道化特有の行動原理に基づいている。危険が去るとむっくり起き上がり，彼一流の道化の知で次のように弁明する。

> 'Sblood, 'twas time to counterfeit, or that hot termagant Scot had paid me, scot and lot too. Counterfeit? I lie, I am no counterfeit: to die is to be a counterfeit, for he is but the counterfeit of a man, who hath not the life of a man: but to counterfeit dying, when a man thereby liveth, is to be no counterfeit, but the true and perfect image of life indeed. The better part of valour is discretion, in the which better part I have saved my life.
>
> (V, iv, 112—20)

Falstaff は死んだ振りをすることで命拾いしたことは事実である。だが彼の説では，命を持たない者は人間の偽物であるから，死ぬことこそ偽物になるということであり，死んだ振りを通して助かれば，それは偽物ではなくて生きた人間の本物の姿ということになる。換言すれば，生きるための死んだ振りは，自己保存のための正当な行為であり何ら問題はないが，死んでからの生きた振りは，そこに明確な目的と意味が存在しない故に非難されるべきであるということになる。勇気のより肝心な部分は分別であり，そのお陰で彼は生き延びることが出来たわけである。Falstaff の論理は，'counterfeit' に対立する二重の意味を持たせ，観客にはすぐに判らない形で，一つの意味から別の意味へと瞬間的に切り変える絶妙の操作に基づいている。動詞 'counterfeit' は「死者を装う」という意味であるが，名詞では意味が「死者の偽物」→「生者の偽物」→「死者の偽物」と目まぐるしく変化し，観客にとっては何となく彼の見事な mock

logic にしてやられたという印象が残るだけであろう。Brian Vickers はこの箇所を次のように考察している。「Falstaff にとって言葉は単に反対のもの (counters), 肯定的もしくは否定的な記号に過ぎず, その両極性は意のままに逆転できる。'counterfeit' という言葉の価値の引き下げと逆転を行なって, シェイクスピアはそれをグロテスクへとさらに一歩進める。」[21] 確かに, Falstaff はその言葉を逆転させたり意味の両極性を利用することで自己の行動を一見鮮やかに正当化したが, 近くに横たわる Hotspur が自分よりも 'better counterfeit' であるかもしれないという恐怖心に駆られ, 彼の足に新たな傷を負わせて自分の手柄にさえしようとする。ここに至ると Falstaff の行動はグロテスクな色合いを帯びてきて, 自己防衛のための詭弁を通して彼は皮肉にも「自己欺瞞」(self-deception)[22] に陥ったことになる。しかし, 事実がどうであろうと, 「人目」につかない限り彼に怖いものはなく, 王党派が勝利を得た時に彼はためらいなく Hotspur の件でそれに匹敵する 'reward' を求めている。王子に否定されると Falstaff は, "Lord, Lord, how this world is given to lying!" (V, iv, 144—45) と声を張り上げて憤慨する。王子が言うように, 彼はこの作品においてまさしく「最も捉え難い奇妙な男」'the strangest fellow' (V, iv, 154) なのである。

III

Henry IV, Part II で, Falstaff が彼とは好対照の小柄な小姓を連れて登場すると, 彼は自己の本質に係わる重要な発言をする。

> The brain
> of this foolish-compounded clay, man, is not able to
> invent anything that intends to laughter more than I
> invent, or is invented on me; I am not only witty in
> myself, but the cause that wit is in other men.
> (I, ii, 5—9)[23]

---

21) Brian Vickers, *ibid.*, p. 116.
22) Brian Vickers, *ibid.*, p. 117.
23) The Arden Shakespeare: *King Henry IV, Part II* edited by A. R. Humphreys (Methuen, 1966). 以後, 作品からの引用はすべてこの版からのものである。

「人間という，この愚鈍で出来た土塊」は，自分が利口であるかの如く Falstaff を嘲笑して得意がっているが，真実を明かせば，Falstaff が考え出すにせよ，ネタになるにせよ，笑いを誘発する根本原因が彼にあることを認識していない。結局，彼自身機智があるだけでなく，他者にも機智あらしめている笑いの天才だということになる。確かに，*Part I* と *Part II* では Falstaff を取り巻く環境に微妙な変化が生じるものの，彼に一貫しているものは，醜悪な面を除けば，鋭敏な機智による当意即妙の対応と時に意表を突いた言動によって引き起こす痛快な笑いである。彼が自己の巨腹に関して多様でユーモラスな表現を用いて話題にする時，我々は彼を笑うが，彼が他の人物たちや世間を見事に出し抜く時，我々は彼と共に笑う。しかし実際には，彼が自然に笑いを誘発するような雰囲気を作り出すという理由だけで我々は笑うのかもしれない[24]。Falstaff が具現するものは「逞しい遊びと快楽の精神」であると言えるが，機智と活力に満ちたこの道化も，このドラマで最も融通の効かない法院長の前では幾分萎縮するかに見える。社会の秩序や法律を厳格に監視する立場の人物は，社会の価値規準や秩序を転倒し，思いのままに生きる者の宿敵であるから当然と言えば当然なのだが，Falstaff は法院長との対話を極力避け，それも出来なくなると駄洒落など言葉遊びを多用して話を逸そうとする。そこで注目すべき箇所は，Falstaff が 'us that are young' と言って自己の若さを力説するものの，法院長によって彼の老齢の諸特徴を指摘される所と，彼が王子との交遊を禁止されたと伝えられる所である (I, ii, 177—205)。*Part II* では Falstaff の老いや病気と関連する表現が散見されるようになり，彼が王子と言葉を交わす場面は非常に少なく，終幕での有名な拒絶の場を除くと，二人は居酒屋で一時を過すだけである。彼は徐々に孤独になり，彼の交遊空間は居酒屋連中を中心とする猥雑で軽薄な仲間へと狭められていく。Falstaff の緩やかな下降には，終幕での Henry V による彼の拒絶・追放というクライマックスに向けての作家の冷静な計算があるはずであるが，その微かな兆候がすでに初幕から感じ取れる。それにしても，この痛風病みの老道化がわずらっている金欠病は相当深刻で，

> I can get no remedy against this consumption of the purse; borrowing only lingers and lingers it out, but the disease is incurable. (I, ii, 237—39)

24) Cf. Walter Kaiser, *op. cit.*, p. 220.

と本人も半ば諦めているが，それは日々休日の精神で生きる者に常に付きまとう哀れな宿命であって，周囲のあらゆる事物を活用する以外に打解策はありそうもない。

長年にわたって他人の善意を悪用してきた Falstaff は，遂に女将から告訴される。一瞬動揺はするものの，本来狡猾で奸知に長けた偉大な道化 'great fool' (II, i, 190) だけに，彼は簡単に彼女を言いくるめて和解し，さらに借金を重ねる。既に述べたように，彼の行為はすべて自己中心的で前道徳的な独特の価値観に根差していて，我々の道徳意識から見れば極めて非情なものであっても，彼にはごく自然な行為になる。ただ作家の関心が，*Part I* ではさほど我々の注意を引かなかった彼の老齢や陰険で卑劣な行為の方に傾きつつあることは確かである。また彼の持前の才気煥発や笑いとユーモアを伴った雄弁さは，相手の攻撃で苦境に追い込まれた時に突如迸る場合が多かったが，彼を取り巻く者が無知で浮薄な連中ともなれば当然そういう機会も減少する。2幕4場の居酒屋の場面では，後半で王子が加わるが，彼らの対話の大部分が野卑で低俗なレベルで展開する。その中で，Falstaff の本質の一面を示す Poins のさりげない表現は一瞥する価値がある。

> My lord, he will drive you out of your revenge and
> turn all to a merriment, if you take not the heat.
> (II, iv, 295—96)

これは Falstaff に散々悪口を言われ，何とか仕返しをしようとしている王子に語られた台詞である。機智と狡猾さでは他者よりも優れているこの 'fat fool' は，柔軟に状況に対処する知恵を持っていて，相手の出方を見ながら，いつしかその場の真剣さ，真面目さを笑いの対象と化してしまう。彼はこの世を享楽の場として捉え，人生のもろもろの苦難や限界を笑いとジョークで超越し，純粋なる精神の自由を謳歌しており，彼の色々な欠点にも拘わらず我々が魅了される根本的理由は，多分その辺にあるであろう。

国内では再び内乱の危機が迫り，Falstaff も再度徴兵に駆け回る。旧友で地方判事の Shallow に依頼し，途中で逞しい若者を数名募ることにしていたが，それはあくまで表向きで，現実には以前と同様賄賂で私腹を肥やし，架空の名前で徴兵名簿を埋めている。以前に，*Part II* では Falstaff の老いや病い，邪悪な行動や緩やかな収縮が特徴的であると述べたが，そのことを示す一つの

要因は，Quickly 夫人や Shallow を筆頭に幾人かの個性豊かな人物たちが，散文によって独特の面白い雰囲気をかもし出していることにある。彼らは善良さ，軽薄さ故に Falstaff のカモになるのであるが，他方では，さほど重要な人物でもないのに結構我々の関心を引き，その分だけ Falstaff の影が薄くなっている。3幕2場終り頃の彼の独白の場面でも，一流の機智と雄弁さが見受けられはするが，「自然の掟」('the law of nature', III, ii, 326) にのみ従って生きる彼の冷酷さ，無気味さの方がより強調されているように思える。

笑いとユーモアに溢れた滑稽な Falstaff の姿は，4幕の戦場の場面で復活する。反乱軍の勇士 Colevile が好意から Falstaff に屈服したのを良いことに，あたかも偉大な手柄を立てたかの如くシーザーの名言を繰り返し，将軍にその武勇にふさわしい報酬を要求している。さらに彼は，

> and I
> beseech your Grace, let it be booked with the rest of this day's deeds, or by the Lord I will have it in a particular ballad else, with mine own picture on the top on't, Colevile kissing my foot... (IV, iii, 44—48)

とまで主張するのである。酒宴には真っ先に，戦いには最後尾で参加することを信条とし，その事実を自他ともに認めているが，臆病で危機の時以外は動きの緩慢なこの道化は，回転の良さ，奇抜な発想によって生の空間を拡大充実する以外に生き抜く方法はないことを認識している。時に彼は，純粋にユーモアと笑いのためだけに自己の欠点を笑いの対象にし，他者とともにその愉快な笑いに参加することはある。だが，笑いや機智が彼の生において重要な意味を持ってはいても，基本的な欲望を満足させることもそれに劣らぬ重要性を孕んでいるであろう。恐らく彼は笑いと毒舌の陰で，常に自己の生存，利益と安楽のために腐心しているはずである。しかも彼は，それを実現するために優れた本能と分別を与えられている。Lancaster 公 John が Falstaff に，王には功績以上の報告をしておこうと言って退場すると，彼はその真意を直観的に見抜いて，そう言えるだけの知恵があればいいのだが，と不信感を吐露する。それから彼はおもむろに，その理由と酒の二大効用を説明するのである。良い酒には二重の作用があり，その一つは，鈍重な頭に刺激を与えて人を聡明かつ雄弁にし，優れた知恵者にするとともに，二つには，臆病の原因である冷い血液を熱

くして五体の隅々にまで送り込み，誰しも勇敢なる行動へと駆り立ててくれる。剣術も酒があってこそ役に立ち，学問にしても酒がなければ宝の持ち腐れになる。王子も飲み仲間と酒のお陰で今日の血気盛んな若者になり得たのであり，もし自分に何人も息子がいれば，

> the first human principle I would teach them should be to forswear thin potations, and to addict themselves to sack.
> (IV, iii, 121—23)

と語って酒についての滑稽な講釈を終える。道化に酒や冗談は付き物であるが，これは戦場にまで酒を持ち込む Falstaff が，まさに本領を十二分に発揮した彼らしい台詞と言うべきであろう。

Lancaster 公の巧妙な作戦により敵軍の指導者たちが捕縛され，大した流血の惨禍を見ずに内乱の危機は避けられる。他方では，Henry IV の衰弱が深刻になり，放蕩生活に憂き身をやつした王子へと政権交替の準備が進められる。Falstaff と部下の一部は途中 Shallow の邸宅に立ち寄り，例の如く陽気で賑やかな酒宴を楽しんでいるが，まさにその時 Pistol が，Hal 王子が Henry V として即位したという重大な知らせを持って飛び込んでくる。その吉報に彼らは狂喜し，急きょ新王のもとへ駆けつけることになるが，Falstaff はその時愚かにも

> Boot, boot, Master Shallow! I know the young King is sick for me. Let us take any man's horses—the laws of England are at my commandment. Blessed are they that have been my friends...
> (V, iii, 130—34)

と有頂点になって叫ぶのである。しかし，すべてが思い通りに展開すると確信した彼を待っていたものは，期待とは全く逆の，Henry V による無情な拒絶の言葉であった。

> I know thee not, old man. Fall to thy prayers.

How ill white hairs becomes a fool and jester!
I have long dreamt of such a kind of man,
So surfeit-swell'd, so old, and so profane;
But being awak'd I do despise my dream.
...
Presume not that I am the thing I was;
For God doth know, so shall the world perceive,
That I have turn'd away my former self;
So will I those that kept me company. (V, v, 47—59)

希望を捨てきれぬ Falstaff は，新王の退場後に気落ちした Shallow に向かって，これはあくまで王が世間に対して示した形式的なポーズに過ぎず，決して本心から出た言葉ではないということ，夜になれば個人的に呼び出され，立身出世の話も十分ありうることを告げている。だが，皮肉にもその直後に悪漢連中は逮捕され，彼らが改心し素行が良くなるまで王の近辺から追放されるのである。

Falstaff の拒絶 (rejection) の問題は，臆病のそれと同様，久しく批評家たちのテーマとなり様々の解釈を生ぜしめた。Falstaff ら 'misleaders' (V, v, 64) の拒絶は，王子により *Part I* の早い段階で観客に知らされ，*Part II* 終幕において拒絶が行なわれるまでに何度かさり気無く我々に伝えられる。従って，特に Falstaff の拒絶は，放蕩生活と訣別して理想的君主にならんとする王子の決意からも，作品自体が要求する必然的な帰結であると言える。とは言え Walter Kaiser が論じるように，彼が拒絶されねばならない理由は我々に理解出来ても，恐らく彼の拒絶に全く煩わされない人はまれであろう[25]。シェイクスピアは *Part II* において，Falstaff の緩やかな下降と収縮を通して追放のための準備を慎重に進めてきたが，それを巡って様々な議論が提出されるという事実を考慮すると，Falstaff の処理に関して作家は何らかの問題を残したと言えるかもしれない。

Falstaff の拒絶と追放に関する幾つかの捉え方を概観してみよう。A. C. Bradley は先のエッセイで Falstaff への同情論を展開し，作家はかくも不滅の巨大な人物を創造し，知性の玉座にしっかりと据えたものの，いざ彼をその地位から引き下ろそうとしても結局出来なかったとして，作家の処理における

25) Walter Kaiser, *ibid.*, p. 272.

失敗を指摘している[26]。Dover Wilson は *Henry IV* をシェイクスピアの偉大な道徳劇として捉える。彼はそのドラマの中に誘惑者，若者，財産と助言を持った父親という三人の主要な人物を認め，人々が慣れ親しんでいた「放蕩息子の物語」というアレゴリカルな劇の視点から解釈している。結論として彼は，一定の型に従って展開するこの種の寓意劇では誘惑者が最終的に追放されることになっており，放蕩者の王子に改悛の時機が来れば，Lord of Misrule としての Falstaff も彼によって当然拒絶されることになると論じる[27]。一方，J. I. M. Stewart は人類学の考え方を援用して，老衰した無力で罪深い王の支配下で荒廃し不毛と化した国土において，救いの雨がその土地に浄化と再生をもたらす前に，その王が彼の息子または他者により儀式的に殺され取って代わられねばならないように，このドラマでは Falstaff が scapegoat として象徴的にも重要な役割を負わされている以上，彼の拒絶は Henry V のもとで国が浄化と再生を獲得し活力を取り戻すためには不可避のプロセスであると論じる[28]。Clifford Leech は，Falstaff の拒絶には雅量を示すような趣が感じられ，それによって Henry V が群衆の心をつかむという政治的心要性があることは明白であると述べている。彼は，さらに，拒絶がもっと慈悲深く行なわれる可能性があり得ただろうと付言している[29]。C. L. Barber の見解では，王子による Falstaff の追放は，性質としては政治的のみならず儀式的でもある非個人的な型を実践しているように思われ，個人の改心という道徳的観念より下のレベルにおいて，Falstaff の犠牲による非論理的浄化の過程を認めることが出来るとする。Scapegoat としての Falstaff を攻撃することにより，王子は Richard と彼の父の統治にまつわる罪や悪運から自己を解放し，活力ある理想的君主になれるのである。しかし，この悪運追放の過程は，劇的に納得のいくものとなるためには，シェイクスピアのドラマにおいて魔術的に生じてはならず，もしそうなれば作家は儀式を喜劇に変える点で失敗したことになる。Falstaff 追放における作家の失敗の理由は，彼がこの時点で儀式を反語的にではなく魔術的にドラマに変形した形で用いていることである[30]。Brian Vickers はやや立場を変えて次のように述べる。我々はもちろん Falstaff の

26) A. C. Bradley, *op. cit.*
27) John Dover Wilson, *op. cit.*, pp. 14-22.
28) J. I. M. Stewart, "The Birth and Death of Falstaff" from *A Selection of Critical Essays*, *op. cit.*, pp. 131-33.
29) Clifford Leech, *op. cit.*, p. 30.
30) C. L. Barber, *op. cit.*, pp. 206-17.

ことを淋しく思うが，彼の最終的な収縮について我々が感じる不可避性の感覚は，シェイクスピアが自己に課した芸術上の問題，つまり，王子の魅惑とその後の幻滅をいかに表現するかという問題を首尾よく解決したことの証であり，これはまさに文体の勝利と言うべきである[31]。

Falstaff の拒絶に関して，C. L. Barber の洞察に富んだ鋭い解釈をはじめ幾つかの見解を見てきたが，程度の差はあれ各々がそれなりの説得力を有しているように思われる。ただ，Bradley 的な感傷的同情論を退けることは容易にしても，作家がこの偉大で尽きぬ魅力を秘めた老道化の最終的な処理において成功したのか，それとも何らかの不備を残したのか，また，どのような形で処理をしていれば多様な議論の噴出を避け得たのか，ということは極めて微妙な問題である。Falstaff が自然法にのみ従い，常に自己を中心に欲望の赴くまま，休日と遊びの精神を具現しながら，価値転倒の世界で享楽主義的に生きようとする前道徳的な道化である以上，たとえ彼が王子に愛されようとも重臣の一人として宮廷に出入りすることは許されない。すべてを許された宮廷道化でさえ，度を過ぎればムチ打ちの折檻を覚悟しなければならなかった。このドラマは，Falstaff の喜劇が相当の部分を占めるものの，Hal 王子を主人公とし，乱世の中で Henry IV から王権を受け継ぎ，放縦な生活から大きな変身を遂げて理想的な国王になる過程を中心に据えた歴史劇であり，歴史劇の目標が，一時であっても静穏で平和な政治的時間秩序を成就することであるとすれば，法を無視し秩序を乱す者はそこから追放されるか隔離されねばならない。喜劇にせよ悲劇にせよ，その中で独自の時間が経過して各々のアクションが展開し，やがてそれぞれが結末を迎えるのであるが，その時間は歴史の一コマを取り扱う歴史劇の時間とは性格上異質であり，この意味では，Walter Kaiser が述べているように，喜劇の瞬間と悲劇の瞬間は本質的に無時間であり歴史の外側に存在するとも言える[32]。作家に特別な意図がなければ，道化たちはいずれの世界でも大した悲運にあわずに生存出来るが，厳然と時間が推移する歴史劇においては，道化も他の人物たちと同様，歴史のメカニズムの中で生と死の問題に直面し，Falstaff が *Henry V* の中で死んでいくように，無事に済むことは難しい。脇役，王子の道化として登場しながら，時に主人公を押しのけ自らその役を演じようとし，さらには国の命運を左右する危険な野望さえ持つに至る Falstaff は，歴史もしくは秩序を志向する大きな力によって追放されたと言え

31) Brian Vickers, *op. cit.*, pp. 140-41.
32) Walter Kaiser, *op. cit.*, p. 271.

る。ある意味で，歴史劇に登場した瞬間からこのような宿命が，無秩序を志向する彼を待ち受けていたのである。Henry V の改心と Falstaff の拒絶・追放をさらに儀式的な次元にまで深めて捉える時，その出来事の背後に，彼の犠牲による「非論理的浄化の過程」と「罪と悪運追放のプロセス」が潜んでいることが明らかになる。

＊　＊　＊

本論第１章で見たように，Falstaff の巨大な体軀の内側には Dr. Johnson を初め多くの批評家たちを困惑させるほど，無限に近い矛盾対立する要素が渾然一体となって息づいていて，それをあらゆる角度から全面的に捉えることは不可能に近い。多様なアプローチを一瞥しただけでも，それらがいかに多岐にわたるかを知ることが出来る。本論では Falstaff の言葉と行動を道化という視点から眺め，それらがいかに道化特有の論理や価値観と結び付いているかを中心に考察してきたが，これもシェイクスピアの人物の中で ‘greatest comic character’ と称せられる Falstaff への一つのアプローチに過ぎない。‘fool’ という言葉を，エラスムス流に，神の前においては万人が愚者であるという最も広い意味で用いれば，Falstaff も当然愚者つまり道化の一人になるのであるが，意味をやや狭めて，シェイクスピア的に宗教的色合いをも含めて，‘clown’ ‘jester’, ‘idiot’ などとも多少交換可能な狂人とか異常で愚かな者という意味で用いると，Falstaff を形成する要素のある部分は概念の外へはみ出て，それらは道化の視点からは捕捉し難いことになる。ともあれ，彼の中に道化の基本的特性の多くが指摘されることは明確であり，このアプローチもそれなりの価値を内包していると思われる。彼は生きるために人一倍本能と分別に恵まれ，周囲のあらゆる事物を自己の悦楽と幸福のために利用し，自己の行動を正当化するために詭弁や奇抜な論理を自在に操る機智や知恵に富み，自己の行動空間の様々な好機を逃さず人生の真面目なものを笑いとユーモアの対象と化し，逆転によって他者の気付かなかった概念の相対性を強烈に印象づけ，賢と愚を合わせ持った不思議な道化である。その彼が最後の場面で，彼の鋭い本能さえ予期し得なかった哀れな宿命に直面し舞台を追われることになるという，まさにこの点に我々は劇的なアイロニーを感じ取るのである。Bradley 的な同情論はともかく，少なくとも想像力の世界においては道化はもろもろの障害に対する勝利者であってもよいのではないかという Enid Welsford の心情は理解出来なくはない。